
初恋ブルー＊バレンタイン編

夏岸希菜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋ブルー*バレンタイン編

【Nコード】

N9339P

【作者名】

夏岸希菜子

【あらすじ】

内気な女の子の、中学最後のバレンタインデー。

恋愛ものって言うと語弊があるような気が……。去年（2010）鬱な気分になりたくて衝動的に書いた話です。

中学最後のバレンタインデーは、私にとって人生最大の悔いを残した行事であった。

二年の夏ごろから意識し始めた佐伯くん。きっかけは文化祭の準備だった。同じクラスで同じ班だったから、割り振られた仕事も同じだった。そのときまで私は佐伯くんと話したこともなく、ずっと無口で怖い人だと勝手に思っていたのだ。だけど、本当は気の付く性格で、笑うと愛嬌のある顔をしていた。なにより私は、佐伯くんが私のミスを文句も言わずフォローしてくれたことが嬉しかったのだ。

二年のバレンタインは、勇気がなくて匿名のチョコレートをこっそり机に押し込んだだけで終わった。今年こそは直接渡そう、と私の頭の中は受験よりも佐伯くんのことでいっぱいだった。

バレンタインの十日前。

「あたしさ、佐伯かつこいいと思うんだよね。今年告っちゃおっかな」

私立高校の試験に向かう電車の中、私の頭の中は真っ白になった。級友の麻夜ちゃんが、そんなことをさらりと言ってしまったからだ。

「そう、なんだ……」

私はまだ、誰にもこの気持ちを教えていない。ましてやこの状況で、私も佐伯くんが好きだ、なんて言い出せるはずもなく、胸のざわめきと動揺を抑え込むしかなかった。

ぐらついた心のまま受けた試験は悲惨だった。解答の合間に浮かぶ麻夜ちゃんの声、佐伯くんの顔。その度に手が止まり気付けば試験は終わっていた。

バレンタインの前日、手作りのチョコレートを準備した。麻夜ちゃんに勝てる自信はないが、今年こそは手渡しできるように心をこ

めて、可愛いピンクのリボンでラッピングした。

そして二月十四日。朝から胸の高鳴りは止まらない。

手提げカバンの中に、壊れないようそっとしまっているチョコレート。

教室に佐伯くんはまだ来ていない。もうすぐ八時。もう、だいぶ人もいるから昼か放課後、人の少ないときに呼び出して渡そう。勇気のない私は、そんなことを考えていた。

しかし、次の瞬間には、膨らんでいた期待と高揚感が急速に萎えていた。

佐伯くんが現れたのだ。チョコレートの入った小さな包みと、幸せそうに頬を赤らめる麻夜ちゃんを伴って。

ああ。私のバレンタインは終わってしまったのだ。

私は悟った。早すぎた。早すぎて感情の整理がつかなかった。

振られてもいいと、覚悟はしていた。でも、結果がこんなに明らかにされていてなお、チョコレートを渡しに行けるほど私は強い。

「知ってる？ 麻夜ってば、佐伯くん待ち伏せして告ってOKもらったんだって。頑張るよねえ」

そんな話を聞いた。友達との会話に、ただうわの空で頷くだけだった私に、お鉢が回ってきた。

「いっちゃんは誰かにあげる予定ないの？」

「……あ、そうだ。私、チョコ作ったの。みんな食べて」 私はカバンから袋を掴んで出し、ピンクのリボンを強く引いた。

こうして、私の手作り本命チョコレートは、数人の女友達の胃の中に消えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9339p/>

初恋ブルー＊バレンタイン編

2011年1月30日14時55分発行